

言語教育の問題とその一考察

——本学幼児教育科生への試みを通して——

鵜丹谷 三千代

I Langage と Langue

「人間はただ、ことばによってのみ人間である。」これはあまりにも有名な言語学者フンボルトのことばである。また、ドイツの哲学者カッシーラーも「人間はシンボルを操る動物」だと定義しているが、このシンボルとはことばにほかならない。

「ことば」という語には、いろいろな意義がある。小林英夫博士の調査によると、17あるという。だが、「ことば」という語にかぎらず、語というものは、抽象的に分析すると多義的になる。しかし、具体的につかわれている場合は、それぞれ一義的である。

言語学者ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857. 11. 26—1913. 2. 2) は、それまであまりにも漠然と用いられてきた言葉という概念に目を据えて、まず言語学の科学的対象を厳密に規定し直そうと試みた。彼はまず人間のもつ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化の能力および諸活動をランゲージ (Langage) とよび、個別言語社会で用いられている多種多様な国語体をラング (Langue) とよんで、この2つを峻別した。

ランゲージはいわば《ヒトのコトバ》もしくは《言語能力・言語活動》とも訳せる術語で、これこそ人間を他の動物から截然と分かつ文化の根底にみられる、生得の普遍的潜在的能力である。

ラングは《言語》という訳があてられる概念で、ランゲージがそれぞれ個別の社会において顕現されたものであり、その社会個有の独自の構造をもった制度である。ラングとは、このように一つの社会制度であって、ランゲージなる生得の能力もこの社会生活を通してのみ実現されるという点は重要で、他の呼吸とか歩行といった本能とははっきり区別されねばならない。

さて、ソシュールがランゲージとラングを峻別した視点に立つ限り、ランゲージは潜在的能力であるのに対し、ラングはそれが顕在化した社会制度であった。

マルティネ (A. Martinet) は、コードとメッセージの概念を使っている。すなわち、ある情報が送り手から受け手に送られ、また理解されるためには、両者が共通のコードを

所有しなければならない。送り手はそのコードに基づいて情報を符号化し、受け手は同一コードに基づいて解読する。この共通のコードが、日本人にとって日本語、フランス語といったラングであり、それと照らし合わせて人々が音声化する具体的メッセージが、パロール (Parole) なのである。個人の言葉が人から理解されるためには社会の約束事なければならないが、その約束事が成立するためには、まず個々人の言葉がなくてはならない。ラングとは、パロールの実践によって、同じ共同体に属する主体に預託された資ともいふべきものである。

ソシュール言語学における最も重要な点は、これまで見てきたような対象の明確化や法論上の態度にまして、その独創的記号 (Signe) の理論にある。

ソシュールはまずプラトンや聖書以来の伝統的言語観である《言語命名論》と、ポーロワイヤル文法の基本にある《主知主義》への批判から出発した。すなわち、われわれの生活世界は、言葉を知る以前からきちんと区分され、分類されているのではない、という事実の指摘である。

つまり、言葉があってはじめて概念が生まれるのである、というのである。

言語を構成する諸要素は、その共存それ自体によって相互に価値を決定しあっている。言葉があってはじめて概念が生まれ、それぞれの語はあくまでも全体の体系に存しており、その大きさはその語を取巻く他の語によってしか決定されない。

それでは、ソシュール言語学は言葉の教育とどのように関わるものであろうか。

彼が対象として追求したものは、人間がいかにして自然的動物から社会的動物へと移していったかを探る最も重要な鍵として、人間の創り出した文化の根底としての言語であり、彼の「一般言語学」という名称からもわかるように、すべての言語に共通する記号的原理を樹立することであった。その意味では、ソシュール言語学は直接には語学教育結びつかない。

しかし言語教育にあたっては、教える側も学ぶ側も、言語に対する正しい認識をもつ必要があることはいうまでもない。

さて最近、言葉への関心が高まってきたように見受けられる。特に就学前の教育の中で、言語教育が重視されてきているのは、世界的傾向といえる。

フランスでは、自国語のフランス語こそ、世界のなかでも、もっとも美しいことばとして幼児のうちから、プライドをもたせながら継承させようとしている。

ソビエトは、ことばを認識獲得の手段として、言語教育に力を入れている。

イギリスは、言語環境の如何によって、子どもの言語発達に決定的な差をつくるとし警鐘をならしている。

アメリカは、ヘッド、スタートプログラムに発展して、就学前のことばと数の補償教育がとりあげられてきた。

さて、日本においてはどうか。

わが国に幼稚園が初めてできたのは明治9年で、当時の東京女子師範学校附属幼稚園、(現在のお茶の水女子大学附属幼稚園)である。以来、100年に及ぶところとなり、言語教育の歴史もそれぞれの時代的背景を受けてきた。

大きくわけて、第2次世界大戦を中心にして、戦前、戦後、現代と三区区分するのが適当と考えられる。

1. 戦前——国家的体制のもとに、ことばのしつけを中心とした、童話、説話による文化の継承が主であった。
2. 戦後——国家的体制がくずれ、それと共にしつけの価値観もくずれてしまった。そのかわりに、個人が尊重されるようになった。幼稚園や保育所施設の普及に伴って、幼児の話す、聞く活動を通した言語教育が重視されるようになった。
3. 現代——経験主義と結びついて、言語教育の登場である。言語と思考、認識との結びつきで「より言語に即した」言語教育が強調されるようになった。

戦後の教育要領や小学校の学習指導要領などの変遷を見ると、同じ「話す」「聞く」指導でも重点が変わってきていることがわかる。「話す」指導を重視する点では、現代も昭和20、30年代と同じであるが、戦後といわれる時代は、集団生活になれ、友だちと元気に遊ぶための「言語交際」の道具と考えたのであるが、昭和40年代に入ると、理解する、考えるための「聞く」指導が大切にされてきた。そして、昭和50年代は、特に「話す」ことによって、論理的な考え方をいっそう高めていく「言語〈表現・理解〉を通しての思考」の言語教育が重視されるようになった。したがって、以上の特徴を大きな流れからみると、言語による、言語を通した、言語そのものといった、言語教育の歴史と変遷があったといえる。

「言語による」という、その「言語」は、おとなのことば、または既成の童話、説話という意味であって、それによって、子どもに望ましい生活習慣や文化を継承させようとした。

次に「言語を通した」という、その「言語」は、子ども自身のことばであって、子ども中心に言語教育が考えられ、話す、聞くという子ども自身の言語活動が重んじられるようになる。

また、最後の「言語そのもの」という、その「言語」は、子どもがやがて、自覚的に使っていくことばの体系のことで、話したり、聞いたりすること(パロール)に対して言語

(ラング)ともいう。

このように、わが国における言語教育の発達には、社会生活の変革と外来文化の影響により、きわめて偶然的な一面をみせてきた。さらに、近代における学校教育は、欧米における近代文化の摂取に急であったあまり、いわゆる主体性の育成を忘れ、知識技術の移入に偏向していた。近代以前に伝統教育が主体的能力の育成をもってすべてを充足させようとした、その伝統教育に近代的発展を与えることが、真の日本文化を創造するものといえよう。

そのためには、小学校の国語教育において主体的学習を取り返すために、指導者と学習者との対話、問答の機会を用意し、現実の必要に即した、指導者と学習者とのコミュニケーションを深くすることが大切であると考えられる。

さらに、さかのぼって、幼稚園、保育園における保育者の言語指導が問われてくることは当然であり、幼児の言語環境こそ、言語教育の根本的革新への問題点があると思う。

したがって、日本でも幼児からの言語教育の重要性を真剣に考えられる人たちからは、今や「言語」を六領域の一つに置いておくことは、問題ではないかという批判すら出されている現状である。

II 日本における言葉の歴史と教育の問題点

わが国の古代の言葉の生活は、話し言葉の文化ともいえる。神話や伝説の起源も成立も発展も話し言葉すなわち「語る」という行為で守られ支えられてきた。「語る」「うたう」生活によって、文化が継承されてきたことが、古事記のほかは日本書紀からも見い出される。わが国には、表記する文字がなかったために、話し言葉とは全然ちがった漢字、漢語を使った。したがって、書き読む文章は漢語であった。古事記では、漢字の音訓を利用して古代説話を記録することに成功した。続いて、漢字の篇旁を略して片かなを作り、また、漢字をくずして草かなを発明し、これらによって話し言葉の表記に成功し、漢詩、漢文に対する和歌、和文の発達をみるに至ったのが平安時代である。

このように、日本の国語は、話し聞く言葉と書き読む言葉とが、別系統のものとして出発せざるを得なかったところに、その後の国語諸問題が、いろんな形で、くり返し起こらざるを得なかったのである。まず最初は、漢存の音だけを抽象して、話し言葉をそのまま表記する、いわゆる万葉がなが始まった。

この時代に発達した和歌、和文は、当時の話し言葉の表記であるけれども、その話し言葉は、少数貴族の社会に行われた話し言葉であって、国民大衆の間に発達した共通のものではない。源氏物語などは、そういう都市貴族社会に行われた話し言葉で語られた世界的

な作品であるが、広く国民大衆のあいだに発達していた口唱文芸ともいべき説話は、そういう和歌、和文とは別な世界の文学として口から耳へ伝承されていた。これらは漢文学者や和文学者の手によって文字に記載され、いわゆる説話文学を成立させているが、その文章は、和語、漢語、仏教語の他に、当時の話し言葉である俗語を加え、いわゆる和漢混交体を成立させている。この2つの系統の書き言葉が日本の文化をにない、明治20年まで発達してきた。

このように明治20年に至るまで過去1000年の間、書き言葉だけが日本の文化をにってきたのである。明治になって欧米の言葉は言文一致であるというところからも、わが国における言文二途にわかれた言語生活に反省がなされて、二葉亭、美妙、紅葉から言文一致運動が起り、今日の口語文が発達した。

言文一致運動が始まってから、実に数十年の間に、放送や録音が発達し、話し言葉がその場かぎりではなく、時間的に長く、空間的に広く行きわたるようになって、この種の言葉が文化の発達をにうようになってきた。

日本の書き言葉も、口語文にあらためる体制ができ、大正9年(1916)にはじめて新聞の全紙面が口語文になった。さらに終戦後、憲法、法律、公用文の類も口語文になった。しかし大事な点になると、やはり文語文に頼って、その役目を果たすというのが現状である。

このような歴史的事情から、現代における言葉の問題がある。

また、読み書く言葉の教育は、すでに研究されているが、話し聞く言葉の教育は非常に立ち遅れている。この不均衡が反省され、もっと言語教育が重視され、実践されていくところに、人間教育も真の文化の継承もあるといえる。

また、近ごろの道德教育の重視も、言語教育の関心と共に、いい傾向ではあるが、いずれも、教育が単なる知識技術の授受であるばかりではなく、主体的能力としてのそれで行われてはならない。その限りにおいて、指導者と学習者との間に行われる一対一の通じ合いこそ、人間教育の大事な機会であり、方法である。この一対一の話しては聞く姿勢の根本は、いつでも、どこでも、神の前に立って、誠実に言動していく精神である。

この意味において、言語教育も道德教育もこれまでのように宗教を抜きにした教育では真の教育は行われない。そういう観点からも家庭教育、幼稚園教育、学校教育が担うべき任務ははなはだ重い。わけても、キリスト教主義学校の保育者養成に対する社会の期待と責任はさらに大きいものがあるといえる。

III 言語教育の問題とその試み

ものを言うことは、話すという行為を通じて言葉が持っている機能を果させ、そして言語表現という、人間に可能なさまざまな表現方法のうち一つを選んで、自分の表現意欲を果すことである。

しかし、ものを言うということが、何よりも人間的な行為であるということは、誰も異を唱えない。だが、世界の歴史的にも現実的にも具体的な個人にとって、この世の中でものを言う権利が奪われていた人々が大勢いる。

つまり、ものが言えない、あるいは言いたくとも言えない国家、社会、環境、立場などの人々が公においても、私的においてもあることを、我々は忘れてはならない。人はものを言うことによって成長し、過去にも現実にも、ものを言うこと自体に、人間として生きる意義と目的があるからである。

だが、戦後になって、日本人のあり方は、タテの関係からヨコの関係に重きをおいて組みなおすべきだということになり、民主主義というパンフレットが配られ、話し言葉のモラルも、「ものを言え」という方向に変わってきた。したがって、美徳とされていた「雄弁は銀沈黙は金」というような時代は終わったかの風潮にさえなった。

終戦後の話し言葉の教育の中心は、みんなにものを言わせるという民主主義の基本に立って人格を作ることにあつた。それは明治33年以来の国語科という授業ばかりではなく、社会科やホームルームの場で、子どもたちがよく話すように教育されてきたことは、高く評価すべきものがある。

これは、学校教育ばかりではなく、家庭や社会の状態も「話す」という地盤変化がみられることによって、その教育の功を大きく助けてきたものといえる。

だが、ここで大きく反省しなければならないことは、確かに、話す子ども、自己主張する子どもは民主主義と共に育ってきた。だが、「話す」行為の基本は、「聞く」行為から出発しなければならない。その「聞くこと」の姿勢よりも「話すこと」が前面に押し出されてしまっているのではないかということである。「聞く」行為はまず「沈黙」から出発しなければならない。今の時代にとって、一番大切なことはこの「沈黙」ではないだろうか。

近年、大学生の国語能力の低下がよく聞かれるところである。私も「領域言語」の授業中において、本学生にしばしば驚かされることがある。あまりにも漢字の読み書きや、まともな言語生活の出来ない学生が年々ふえているような気がしてならない。授業中のおしゃべりも多い。テレビとマンガで育ってきた現代学生の全般的な傾向という世の識者の意見さえきかれる昨今である。

また、言葉の基本である対話、問答、会話における、言語生活の貧しさも合わせて考え

させられてならない。総じて、自己主張の言葉の強さと巧みさはあっても、話し方の精神とルールとが、身についていないのである。まさに現代の言語教育の課題とは「雄弁は銀、沈黙は金」のもつ真の意味を深く追求していくことではなかろうか。

したがって、私はここに言語教育の再認識と必要性を強調しながら、以下、本学における私の試みを「領域言語」の講義概要を通して述べ、関係者の批判とご指導を頂きたい次第である。

「領域言語」の講義対象

幼児教育科1年 2単位

テキスト

1. 西尾 実著 「日本人のことば」 岩波新書
2. 中央幼児教育研究会編「言語の保育」 学芸図書

授業は、講義のほかに次の活動を通して、学生ひとりひとりの対話、問答に重きをおくようにしている。それは、グループの研究発表を通して、司会、報告、説明、意見、感想などの機会を設定し、「話すこと」「聞くこと」の理論と実際の場でもある。(写真1)



写真 1



写真 2

さらに前期には1単位として特に設けられた「児童文化演習」の講座の中で、上記の授業と並行して、「話しことば」の視聴覚化を試みている。これも、グループの研究発表で、指人形、影絵、ペープサート、マリオネット、紙芝居、素話、それに児童劇と多種多様にわたっている。夏休みに入る前の幼児教育科をあげての発表会がそのピークである。(写真2)

もう、十年以上もつづけられてきたが、相変らず試行錯誤である。方法は、1年生の司会、進行のもとに、1年生の発表である。2年生は1年前の経験と実際(本学附属幼稚園3カ所に、毎月お誕生会に2年生はグループ別で人形劇出演として参加。また、その他の施設の要請にも応じている)の上に立って批評をする。そして、この日の審査委員会(2年生・各クラスから選出)による感想と順位発表、次いで表彰式という次第である。

これらの方法の利点をアンケート調査から多い順に列記してみると、

1. グループの連帯感が養われた。
2. お互が知り合う場になった。
3. 4月入学以来、発表という一つの目標を目ざしてきたので、迷いや悩みの時期を乗り切られた。
4. 一堂に会し、先輩の発言の場があるので、その後の先輩後輩のよりよい関係が生まれやすかった。
5. 他のグループの発表をみることによって、広く「話しことば」の視聴覚化、表現の経験をもつことができた。
6. 発表という経験を通して、幼児教育者への自覚がめざめてきた。
7. 「人間と言葉」のもつ領域の広さ、深さへの理解の手がかりになった。
8. 学生同志の個性の発揮場となった。
9. 学生と教師とのコミュニケーションがあって、授業以外にも、対話のきっかけをつくった。
10. 授業は、教師と学生たちで作りあげるものだということがわかった。
11. 発表する側になってはじめて、いままでの無神経なおしゃべりが反省させられた。
12. 発表形式が体験を通して身についた。

この他に、「ことばの造形化」を試みている。カードづくりである。(写真3)

ギフトカード、誕生カード、クリスマスカードなどである。台紙になる厚紙を1枚ずつ手渡し、主旨とつくり方の説明をして、期日までに提出させる。いわゆる課題である。ちょうど、クリスマスシーズンにあたる頃の課題なので、評価のあと、クリスマスカードは社会福祉関係の施設や受刑者たちへの発送に、学生たちの協力を得て用いられている。

その他、学園祭の展示を目標に「手遣い人形」の制作も課題として提出させてきた。その後の実習先で言語表現の一端として利用されているようだ。(写真4)

また、後期の授業内容は、幼児の言語指導の基礎を中心に講義をすすめながら、具体的

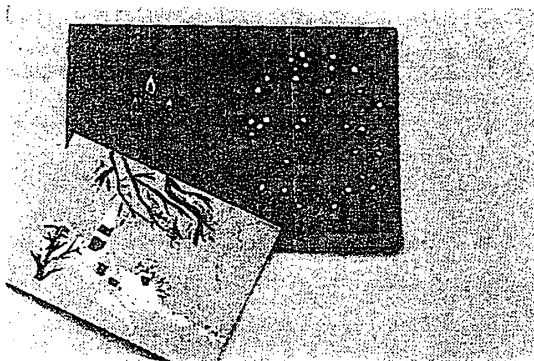


写真 3

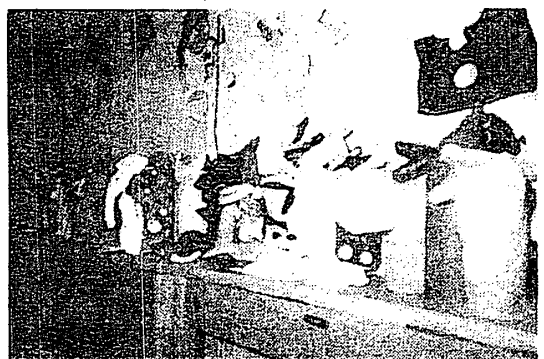


写真 4

な指導内容も展開している。

ここでも、ことばのあそび、教材の生かし方を、グループ発表させながら、「幼児の言語指導の理論と実際」をめざしている。(写真5)

また、折ある毎に、書き言葉も指導している。これも、課題として、毎年、5月、「母の日に因んで」の作文や詩を、提出させることを通して、指導してきた。

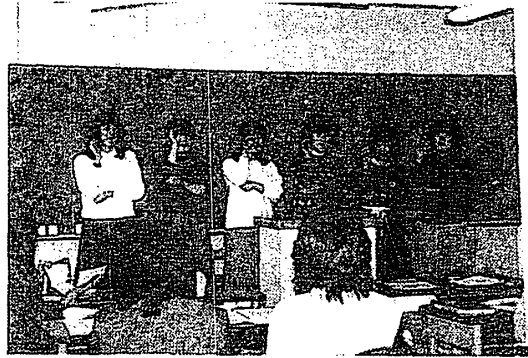


写真 5

その中から何篇か、一般の応募学生の作品も含めて母の日の本学合同礼拝のあと発表し、本人に朗読をさせる。(発表前に朗読指導をする)

このあと、全体的な概評と作文指導の要点を授業の中で行っている。

レポートの書き方も、感想文、手紙文の指導も、1年間を通して折ある毎に指導してきたが、どれほど学生たちは身につけているのだろうか。年度末には、私自身ころもとなく言語の講義時間の不足とその指導内容の如何が問われてきてならない。

講義のしめくくりは、聖書の言葉を引用するように心がけている。

例えば、詩篇119篇より

◦清さへの導きとして、9節。

「若い人はどうしておのが道を
清く保つことができるでしょうか。
み言葉にしたがって、
それを守るよりほかにありません。」

◦望みへの導きとして、43節。

「またわたしの口から真理の言葉を
ことごとく除かないでください。
わたしの望みはあなたのおきてにあるからです。」

◦自由への導きとして、45節。

「わたしはあたたのさとしを求めたので、自由に歩むことができます。」

◦知恵への導きとして130節。

「み言葉が開けると光を放って
無学な者に知恵を与えます。」

◦真理への導きとして160節。

「あなたのみ言葉の全体は真理です。
あなたの正しいおきてのすべては
とこしえに絶えることはありません。」

IV 結 び

日本語は、仲間内の言語である。

(岩淵悦太郎)

その仲間ということは、その様子を非常によく見知っていることである。学生たちへの言語指導のあらゆる機会と場を通して私は、日本人のことばについて考えることが、年々多くなってきた。

また、自分のまわりの人たちとの言語生活の中で日本語は、「仲間内の言語」だということにも、思いをいたらせてられている。

欧米の人たちは、日本人にくらべて個人主義に根ざしていることもあるので、話の内容に実に具体性を求める。日本人は、その点、なんとなく、おおよそ、だいたい、ぼんやりと見当がつくと、ああ、わかったで事足りることが多い。いわば、日本人は単一民族としての国民であるので、仲間内の意識が強く、そのために、音声言語として、いいあらわさなくても、その場の様子や表情や身ぶりなどから理解してしまうのである。

つまり、日本人の言葉は周囲の状況に寄りかかって表現し、理解しあったりしているといえよう。

学生たちとの対話や会話、また発表を通して、音声言語の表現の不備さを指導してきた。けれども、時として教師と学生のコミュニケーションが深まってくると、その慣れからくる、現状判断から、聞く側が表現の不足分を埋め合わせてしまうことになりやすい。

「話す」ことの基本は、対話であって、話し言葉の教育の基本も、この一対一の対話にある。授業中の対話や問答で大切なことは、その場に適すること、授業の流れにそったものでなければならないことはいうまでもない。

講義も、教師側の一方的なものではなく、学生たちと共に、作りあげるものであること、の認識の上に立って、支えられ、進められていくことに、その目的が達せられる。

教師は自分が講義をする、ということではなく、学生も自分たちの聞く行為が優先すると思ってはならない。

なぜなら、「話す」行為は「聞く」側の行為によって導かれ、「聞く」行為は「話す」側の行為によって支えられているからである。

したがって、「話し言葉」は、決して、一方交通ではなく、最初から最後まで相互の通

じ合いである。

「おしゃべり」の多い授業は、学生たちばかりの責任ではない。「名講義」の進展も、教師だけのほまれにはならない。

このことを、明らかにしたのが、フィードバック (Feedback) の理論である。フィードバックという語は、工学用語であるが、フィードバックの概念は、革命の科学とよばれるサイバネティックス (「舵手」のギリシア語に由来する語) における重要な概念として発展してきたものであるが、広くは、物理にも生理にも存在するというたてまえから、社会現象にも適用されていて、言葉の説明にもおよんでいるのである。

言葉の世界におけるフィードバック現象とは、相手の考えや感じを知ってメッセージを修正する働きをいうのである。したがって、よき聞き手は、よき話し手を生み出し、よき話し手は、よき聞き手に支えられる。「聞く」ことの訓練は、したがって「沈黙」のもつ深い意味と実践とが導かれていくことであり、人間関係を大切にすゝる行為である。また、それは「神の言葉」を「聞く」姿勢につらなり、ひいては、人間に対する忍耐と愛情を育てていく積極的な行動であるといえる。

以上、現代社会の大きな特徴といわれる「言葉の氾濫時代」「言葉の重みを失った時代」における、言語教育の問題と一考察を本学における試みを通して述べてきた。だが、充分にその意をつくすことが出来なかったことは残念である。今後、更に言葉の研究、特に「神の言葉」の研究をつづけていきたい所存である。

終わりに、次の言葉を引用して、本稿を結びたい。

「言語の研究は、正しくは言語が何について用いられるかを学ぶことに始まる」

Wendell Johnson

「言語の研究には、現実生活となんのかかわりもないつまらぬものがある。こういった言語研究は、学校教育の場から追い出す必要がある。だが、もっと深く、もっと完全に言葉の使い方を研究することは、あらゆる点で、われわれの生き方の研究にほかならない。それは解釈活動のあらゆる様式にふれる問題であり、文明の基盤にふれる問題である。」

L. A. Richards, 1983—1979

参 考 文 献

1. S.I. ハヤカワ, 大久保忠利訳「思考と行動における言語」岩波店書, 1976 (改版)
2. フェルディナン・ド・ソシュール, 小林英夫訳「一般言語学講義」岩波書店, 1972 (改版)
3. 渡辺三男「日本語の表記と文章表現」桜楓社 1968
4. 西尾実「ことばの教育と文学の教育」筑摩書房 1966
5. 西尾実「日本人のことば」岩波書店 1965
6. 外山滋比古編「ことばと教育」講談社 1981
7. 中央幼児教育会編「言語の保育」学芸図書 1975